【暮らしの学び舎 Salmatt 企画】家庭科で育つ子どもと私の Well-being
第1回 20260425(土)10:00-12:00

2026 年度「暮らしの学び舎 Salmatt 企画」家庭科で育つ子どもと私の Well-being の第 1 回「オリエンテーション「新生家庭科に向けて」を 4 月 25 日（土）10 時からオンラインで行いました。新年度のお忙しい中，約 20 名の方々が参加くださり，梶山さんと中村さんが企画の準備，当日の運営，進行を担当してくださいました。子どもの成長における家庭科教育の大切さ，家政教育と我々の生活の Well-being とのつながりを共有できる皆様と貴重な時間を過ごしました。
第 1 回は，鈴木が主催者としてオリエンテーションをかねて家庭科教育の現状と課題について話し，その後，参加者全員で自己紹介も含み，各自の課題や関心事を共有しました。プログラムは次の通りでした。

9:45～10:00（15 分）	受付
10:00～10:15（15 分）	趣旨説明，スタッフ紹介，2026 年度前半の予定及び参加方法について説明
10:15～11:15（60 分）	講演「新生家庭科に向けて」
11:15～11:45（30 分）	協議
11:45～12:00（15 分）	諸連絡，アンケート，次回予告

講演「新生家庭科に向けて」の内容は次の通りでした。
1. 家庭科の授業づくりのために，2. 生活者として目指す資質・能力，3. 家政学における生活のとらえ方，4. 家政教育と家庭科教育，5. 学習指導要領改訂に係る情報，6. 日本家庭科教育学会の動向，7. 家庭科カリキュラム構想に求められること，8. 未来志向の生活創造に向けて　詳細はパワーポイントの資料ファイルをご覧ください。以下に要約を示します。

家庭科教育の現状と課題

2022 年の研究成果から生活科学的理解と実践的な態度の育成に課題があることを報告した。時間数の不足，生活教育の必要性への視点の弱さ，そして教育課程全体の中での家庭科の位置づけが主要な課題であると指摘した。さらに，科学的理解力，生活技能習得，他者との相互作用による自己の生活の創発という三つの資質能力を家庭科教育の目標として提案した。

家政学教育の背景学問

家庭科の背景学問としての家政学について，人と環境の相互作用，実践的総合科学など重要なキーワードを強調した。家政教育と家庭科教育の違いについて，家政教育が教育のあらゆる場で人間の調和的発達を図るものであることを述べた。

学習指導要領改訂に係る情報

家庭科の学習指導要領改訂に係る情報について，文科省教育課程部会の家庭ワーキンググループ第 1 回と 6 回目の資料に基づいて共有した。現行の学習指導要領において，以下の 5 つの検討課題が特定された：小中高における目標・内容・方法の体系的な整理，少子高齢化による家庭生活の変化への対応，高等学校の家庭科の整理，デジタル学習基盤の活用，家庭科の指導上の環境整備である。学習指導要領の改善案について共有し，生活の営みという概念を重視することを強調した。新しい枠組みでは，当該教科で扱う事象や対象を最初に示し，その後当該教科固有の物事を捉える視点を説明することが求められているが，このことへの疑問も呈された。さらに，空間軸と時間軸の視点から学習対象を整理し，小中高各段階での系統性を確保する必要性について述べた。家庭科の領域整理については，第4回のワーキングで変更が示されたが，新しい枠組みでは，生活の基盤に関する領域と生活を構成する要素に関する領域の二つに分類し，前者は A（家族・家庭生活）と B（家庭経営・消費生活），後者は C（食生活），D（衣生活），E（住生活）としている。B で扱われる「生活経営マネジメント」の内

容を最初に取り上げることの必要性について述べた。一方で，家庭科の教科名との関係で「家庭や家族の捉え方」についても検討していく必要性について述べた。

家庭科教育の現状と今後

家庭科教育の現状と今後の方向性について，日本家庭科教育学会の動向について報告した。日本家庭科教育学会は 2027 年に 70 周年を迎え，子どもの実態調査を含む全国調査を実施し，家庭科の理念整理と指針明確化を図って記念書籍を刊行する計画がある。子どもたちが持続可能な社会を目指して能動的に行動できるよう育てることが家庭科教育の真の目的であることを強調した。

その後，参加者全員で自己紹介も含み，各自の課題や関心事を共有しました。

NT さんは，家庭科教育における課題について，教師が生活を構造化して概念化することの重要性を強調しました。SS さんは，中学校教師として，生徒の個人的な状況に応じた教育の困難さについて共有し，教師自身が生活を構造化できるかどうかという課題に触れました。TA さんから小学校の教師として，5年生の家庭科指導における児童の反応と興味について報告があり，生活経験から生まれる学習意欲の重要性が強調されました。MS さんからは，中高等学校の教師として，非常勤講師の大学院生による授業への参加が刺激になっているとの思いや，教科指導以外の多忙さの中でも初心が重要であることが報告されました。HY さんは，4 月に小中一貫校の家庭科教師に転任したことと，新しい学習指導要領に基づいて教材を研究していることを報告しました。TS さんは，大学で家庭科教員養成に携わる中で，新しい学習指導要領に向けた家庭科教育の改善について話し，授業の構造化の重要性を強調しました。参加者たちは新しい学習指導要領への対応と家庭科教育の質の向上について意見を交換しました。家庭科教育の現状と課題について，SY さんは，本企画参加による，教師としての成長への期待について話しました。KR さんは，現場の教師が理論と実践の橋渡しを求めていること，そして家庭科教育における理論と実践の統合の重要性について話し，大学と現場の連携の必要性を強調しました。KY さんは，新学習指導要領における家庭科の領域分けについて懸念を示し，営みの観点から統合的なアプローチの必要性を指摘しました。

まとめ

生活の捉え方，構造化など，授業の質や教師の視点について議論が行われ，参加者たちは，理論と実践のギャップを埋めることの重要性を強調し，教師の視点と学生の視点の両方を考慮した授業設計の必要性について共有できたと考えます。